

## 序章 貧しい人々に寄り添って

「エリコ、エリコ……」。扉の外から遠慮がちな声が聞こえて目が覚めた。相棒のティナの声だ。時計を見ると夜一時。きつと誰かの陣痛が始まったのだろう。横で寝ている二歳と五歳の子どもを夫に頼み、外に出た。フィリピン、マンガハンの夜空にもうすぐ満月になる月が輝いていた。

陣痛が来たのは近所に住む十九歳の初産婦。予定日を十三日も過ぎ、この四、五日お腹が痛むと時々やって来ていた人だ。産院に近づくと中から、彼女の「アライコー（痛いよー）」という声が続いてきた。陣痛の痛みは予想を超えた種類の痛みだ。彼女はもう半分パニックになっている。母親が手を握っておろおろしている。外には夫や父親、兄弟、そして彼女の声に起こされた近所の人たちも心配して集まってきた。急に強く痛み出したようだ。

腹診し、トラウベ（胎児の心音をきくための木の筒）で児心音を聞く。赤ちゃんは元気だ。すると、産婦がまた立ち上がった。この人たちは分娩の第一期を歩き回らなければならないと思っているのだ。陣痛は四、五分間隔できている。彼女の腰やお腹に手を置く。日本では大昔、産婆

のことを「腰抱え」と呼んだそうだ。今の私がやっていることはまさにそんな感じだ。

少し冷静になった産婦の周りの人たちが安心したのか、代わる代わるお腹に触れ「こうやってきばりなさい」「ビッキース（腹紐）をもつと締めて、歩かなきゃ」とアドバイスを始めた。今の段階に適さない指示には、私が大げさな身振りでケチをつける。夜中のクリニックにドツと笑いが起こる。九十度に背中曲がった老女が、自宅の鶏の巣から生卵を両手で包むように持ってきた。「これからだよ、さあ、力をつけなくっちゃね。私たちにも産めたんだからあんたにもできるよ」。産婦は痛みに顔を歪めながら頷いた。いい陣痛が来ている。意外に早いかもしれない。

他人のことでも誰もが気軽に口を出し、気遣い、そして手を貸しあう。ここは人と人との距離がとても近い。

私のクリニックはフィリピン、サンバレス州、マンガハン再定住地という、一九九一年のピナツポ火山の噴火で全てを失った被災民に開かれた土地にある。ここは今でも貧しい人々が多く暮らしている。夫の仕事（IKGS緑化協会という植林NPO）の都合で、私たち家族が暮らし始めて五年になった。（\*二〇一三年のいま、暮らし始めて十六年となった。この文章は二〇二二年、「助産雑誌」〈医学書院刊、当時の誌名は「助産婦雑誌」だった〉に書いたものをもとにしている）。

現地語を理解できるようになると、さまざまな噂が聞こえてきた。ここではお産を通じて実に多くの母子が死亡している。分娩第一期からいきみを強いて、無理にお腹を押ししたり、不潔な手

での用手開大（分娩進行に伴い熟化している子宮口を指で開大すること）をしたりと、産婆や助産師の間違った知識による処置が横行していることもその一因だ。

ある時、私の友人二人が相ついで妊娠した。うち一人は結婚四年目にしてやっとできた赤ちゃんだ。私のことを助産師だと知る彼女らは、自宅でのお産を私に頼んできたのだが、まだ生後二か月の下の子どもを連れて、彼女らの住む町に行くのは無理なので、「私の家に来てよ！」と誘っていた。ところが、私に遠慮して二人とも近所の助産師を自宅に呼び、出産することを選んでしまった。第一期からきばり、押し、こじ開ける処置の結果、二人の赤ちゃんが産声を上げることがなかった。私が行っていればこの子たちは死ななかつた、と自惚れるつもりはないが、後悔の涙が流れた。このような母子の不幸を「そういう運命だった……」と納得させることができなかつた。

ここでは産婦は待つているだけでは来てくれない。これ以上、納得できない母子の死亡の話を聞かないで済むように、産婦が気軽に来られる場を作ろう。二人のお産に関わることができなかった無念さが背中を押した。程なく、道から近い友人テイナの家の庭に、粗末な藁葺わらがきの小屋を建てた。そして、この小屋の名前を、私を育ててくれた大阪の聖バルナバ病院から貰い、「St.バルナバ・マタニティ・クリニック」と名づけた。ここで無料診療を始めて一年半。この間に約三千六百人のさまざまな患者がここを訪れ、八十五人の赤ちゃんが元気な産声をあげた。

医師でもない、私のような未熟な外国人助産師を、これだけ多くの患者が頼らなければならぬ背景には、フィリピンの悲しい医療事情がある。

行政による保険制度がないこの国では、お金がなければ十分な医療を受けることはできない。（\*現在は改善されつつあるが、お金がなく治療をあきらめる患者も多い）。公立病院ですら、患者に支払い能力があるか否かをまず確認し、お金がなければ診察は行われぬ。何とかお金を工面して診察を受けることができて、薬剤や検査などに高額な実費が必要なため、貧しい患者は買えない薬剤の処方箋だけをもらって帰宅しなくてはならない。

また看護婦や医師らの医療スタッフから「薬も買えないのに、どうやって治すつもり？」などの暴言を受けたり、診察の順番を故意に後回しにされるなどの経験から、病院に行くことを恐れている人も多い。日本で一般的に言われる「病院出産は安全」という考えも、ここにはない。私のクリニックに来る患者曰く、「病院では看護婦に歩かないと叱られ、何もしてもらえず、かなりの頻度で帝王切開される」のだそうだ。その費用は彼らの生活レベルでいえば、一年以上の生活費に相当する。それらの結果、貧しい妊産婦は病院に行くことを嫌がる傾向にある。

ここSt.バルナバ・マタニティ・クリニックに来る妊産婦、病人たちは皆、私が医師でないことを知っている。「マタニティ・クリニック」と看板をあげているにもかかわらず、下痢や発熱などの急性症状から、高血圧、ガン患者まで、実に多様な患者がやってくる。彼らはここでは差別されたり、お金を請求されたりしないことを知っているのだ。そのせいか、いつも待合には何となく、ほのぼのとした空気が流れている。当然ここには貧しさを攻撃する医療従事者もいないし、貧しい彼らを見下すお金持ちもない。ごくごく当たり前前に患者同士が話をし、アドバイスをし

あう。初めて来た患者に、このクリニックでやっている食事指導を説明し、その効果はどうだったと演説している患者がいたり、歩けない患者を他の患者が抱きかかえて中まで運び入れてくれたり、診察後の患者を近所の人が自宅で寝かせたり、食事を振舞っていることも珍しくはない。持っているときは分け合い、ないときは分けてもらう、これらは貧しい人たちの暮らし方の知恵なのだろう。そこには損得勘定は全くない。フィリピン人が持つホスピタリティと言われる部分で、ごく自然な彼らの暮らし方なのだ。

産婦が来たときもこのホスピタリティはよく発揮される。陣痛で苦しんでいる人を見ると出産経験者は、自分の時はどうだったと話して聞かせ、励まし、時には余計なアドバイスをしたりする。そこにいる患者が一時、自分が病気であることを忘れ、その産婦の家族のようになるのだ。診療時間中に産声が聞こえると、診察を待っていた患者たちも産婦の家族と一緒に「わあー！」と歓声を上げる。カーテンの隙間から赤ちゃんを一目見ようと覗き込む人、勝手に名前を考えている人もいる。全ての処置が終わる、家族に「もう入ってもいいよ」と告げると、待合の患者までもが「おめでとう！」を言い入ってくる。それが余りにも自然で遠慮がないので、私には誰が知人で、誰が全くの他人なのか区別がつかない。診察を再開して、さっきの産婦の家族だと思っていた人が、深刻な顔で自分の病状を訴える。つい笑ってしまう瞬間だ。

貧しい人たちは病気になるたびに簡単に病院に行けない分、昔からの言い伝えや自然を活用する方法を今でも実践している。それは母子に関しても同じで、タンニンを多く含む種類の緑葉

を煮たお湯は産後の会陰部洗浄に用いられ、乳児の咳にはオレガノの葉を煎じて飲ませる。

こんな伝統的なことを、九年前の青年海外協力隊に参加した頃の私なら、実践することはなかっただろう。どちらかといえば否定的であつたと思う。実際、乳腺炎に効くとターメリックを混ぜた粉を排膿部分に塗りつけ、余計に化膿した患者や、骨折には海中でのマッサージが良いとせつかつけたギプスを外してしまい、片足が短くなつてしまつた子どもなど、悪い面を見るが多かつたからだ。

だがその一方で、一つ疑問が残る。それは「私が学んできた現代医療が、全ての人を助けているのか」という問いである。答えは「否」だ。現代医療の多くは薬や検査に頼るという点で、お金が必要だ。そのため本当に貧しい人々には行きわたらないという現実を、私は何度も目の当たりにした。一錠の抗生物質が買えず、肺炎で亡くなつた子ども、自宅出産で三十六時間も胎盤が出ず、交通費、薬代がなくて処置が遅れた褥婦（褥婦＝胎盤娩出後から一か月までの人）など、そこにはお金があれば助けられた現実がたくさん転がっていた。「貧しいという理由で病気に苦しまなければならぬのか」。きつと何か違う。神様というものが存在するならば、貧富に関係なく、誰でもできるケアを用意して下さつてくれるはずだ。

そういう視点で私なりの模索が始まつた。それがこの土地に自生している有用植物や食物を用いる民間療法であり、安価な漢方薬（日本では高価な漢方薬がフィリピンでは市販薬の一割程度と安価）であつたり、手や身体を使うマッサージや温灸であつた。たとえば生後〇〜三日ぐらいの新生児にニガウリの葉の絞り汁を飲ませる。気管の粘液や胎便の排泄を促すためだという。母

乳、水、糖水以外のものを飲ませることに初めは戸惑つたが、どの子ども当たり前のようこれを飲み、何も問題が無いことを確かめた。そしてこれは胎便の排泄には効果的だつた。後々、日本で胎便排泄の重要性について書かれた文献に出会い、これがフィリピン特有の考えではないことを知り、昔の人の知恵に改めて感心させられた。産後、身体を冷やすこと、動かすことを、この人たちは特に嫌う。これは海を隔てた日本でも、中国でも共通した考えがある。ならば一種真実なのだと考えてもおかしくはない。科学的に説明をすることは難しいかもしれないが、やることで何らかの効果があるからこそ、長く伝わつてきているのだろう。患者に必要なのは理論ではなく、結果なのだ。

この人たちは貧しく特別なものは何も持たない分、生活の全てが自然体だ。身体が冷えるとむくみや痺れ、痛みが起こる。こんな時は生姜湯を飲んだり、ココナツツ油に唐辛子や胡椒（粒を砕いたもの）を入れたものでマッサージをする。乾季は外に長くいると熱射病になるほど暑くなるが、そんな時期には多くの果物が実り、庭先でも簡単に果物が手に入るようになる。果物の多くは身体を冷やす働きをするので、人々は当たり前のこととしてたくさん果物を食べて暑さから身を守る。雨季の寒い時には身体を温めるような野菜が豊富になる。日本のように年中あらゆる種類の野菜、果物が手に入るという環境は一面便利でも、かえつて人間が持つ自然と共存する力を忘れさせているのかもしれない。

たとえば、近所の人が陣痛の始まつた妊婦を飛び込みで連れてくる。その間に食事を届ける人、

上の子どもたちの面倒を見る人、洗濯を手伝う人、産婦に付き添う人と、皆が助け合う。赤ん坊が泣いたら、必ず誰かが抱っこをしている。家族以外の人も代わる代わる赤ん坊の面倒を見る。オムツをしていない子がほとんどで、おしっこをされても「アハハ」と笑って済ませ、誰も気にしない。子育てをするのは母親一人ではない。母乳が足りない子には近所の母乳の出る人がお乳をやっている。ここには母子の健康を自然に見守り、助ける人が大勢いる。私はそんな彼らが出産を通して悲しむことがなくなるよう、わずかでも手伝いたいという気持ちで毎日を通り過ぎてきた。しかし手伝えたことよりも、何十倍も何百倍も彼らから気づかされたこと、教えられたことの方が多かった。

自然と共存する生活と医療、お産も育児もここでは自然の一部なのだ。電気のない所では出産時に照明を落とす必要もない。清潔なものやインフアント・ウォーマー（赤ちゃんへ処置をする暖められた台）などないので、生まれ出た赤ん坊は一番きれいで温かいと思われる母親のお腹の上に乗つけられる。彼らのすることに理屈はない。そうすることが当たり前なのだ。しかし、この当たり前のことを歪める力が、ここにも入ってきている。それが病院出産の方法をベストだと信じる産婆や助産師であったり、派手に宣伝される人工乳であったり、である。この歪みに少しでも歯止めをかけるために、私はここにいる機会を与えられたのかもしれない。

産婦は生卵を飲んだ。陣痛はどんどん強くなっている。汗だくの産婦が叫ぶ。「助けて！ 手伝って！ お腹を押して！」。彼らにとつてはお腹を押してもらい、赤ちゃんを押し出すお産が

普通なのだ。私は腰やお腹をさすりながら、できるだけゆっくり、そしてやさしく言う。「今押すと赤ちゃんが苦しくなるよ。あなたはがんばれる。神様はいつもここにいる。そうでしょう」。産婦は立ったりしゃがんだり、何とかして少しでも楽になれる体位を探そうとしている。「ねえ、（会陰を）切ったら生まれる？ 切って！」「切っても生まれない、さあ息を抜いて」。いつもの私の調子にティナが横で笑った。「どの人でも産めるのよ、大丈夫よ」。六人の子持ちのティナはゆとりで産婦を落ち着かせる。大騒ぎする人ほど体力があるのだろう、陣痛はどんどん強くなる。便器にしゃがんだ姿勢から産婦が動かなくなった。自然といきみが入っている。お湯や産着の用意ができた。このままの姿勢で赤ちゃんはゆっくり出てきた。「ふにやふにや……」と言っただけで、赤ちゃんはほとんど泣かない。私の手から渡された我が子を見て「泣かないけど、大丈夫？」と不安げに産婦が尋ねた。「よく見て。この子、苦しそう？ ほら目を開けてあなたを見ているでしょう。赤ん坊でも泣くのは何か嫌なことや痛いことがあるからなのよ。上手にお母さんが産んでくれた子は大声で泣かないの。この子はすごく元気な良い子よ」。不安のなくなった産婦は飛びきりの笑顔で自分を見つめる赤ちゃんに応えた。

もう外は明るくなってきている。近所の人が早朝にもかかわらず喜び騒いでいる声が聞こえる。今までどこに隠れていたのか、やっと産婦の夫が中に入ってきた。近所の人もそれに続く。誇らし気な顔で産婦が言う。

「私が産んだ子よ。かわいいでしょ！」

私は産婦がして欲しかったお腹を押すことも、会陰を切ることもしなかった。ただ産婦のそばにいただけだ。この辺りの産婆や助産師たちは特別なケア(押したり、用手開大すること)をして、「私が産ませてあげた。私のおかげで早かった」と誇らし気に語る。悲しいことに病院でも保健所でもこの間違った特別ケアは、日常的に行われている。大多数の言うこと、することは正しいことであると信じられているのが私にはとても歯がゆい。私が特別なことをしないのに戸惑う産婦は多いが、どの人にも傍らに付き添い、腰やお腹をさすりながら簡単な説明を繰り返す。その結果、産婦は「自分の力で産んだ」と実感してくれる。こんなありがたいことはない。

妊娠は病気ではないので、健診は必要ないと考える人は少なくない。健診に行くための交通費があるならば、彼らにとつて、その日のお米を買う方が大切なのだ。最終月経が定かでないのに、「私は何か月？」と聞かれる。予定日超過なのか否か、私にも判断できない。突然の子癇発作しかんもよく聞く。「病院に行きなさい」と切り捨てるのは簡単だが、彼らの生活を知られば、それがどれほど大変なことがわかる。妊娠、出産を通じての不幸を「運命」と片づけてしまわないようにするには、彼らもつと自分の身体について知り、自己管理できるような働きかけが必要なのだ。トラウベと腹診、問診だけでリスクを見つけ出さなければならぬ。しかし、未熟な私はこのリスクを見落とすことが多い。それでも毎日、患者はこのクリニックに来てくれる。「必要としてくれる人々に応えたい。みんなの笑顔の中にいたい。毎日が私にとつての勉強だ。患者が私を育ててくれる。患者から頂くものの百分の一でもお返しができるようになりたい」という気持ちで診療に当たる。お産特有の幸せな空気の中に、特別な存在としてではなく私もいさせてもらえ

る。私が自然に受け入れられているという事実には、お産を私に手伝わせてくれた産婦に、無事にお産を終えることができた喜びに、私の周りにいる多くの人々に、そして人知を超えた大いなる力に私は感謝している。

ここはトラウベと未熟な助産師が一人いるだけ、小さな小さなフィリピンの産院。しかし、ここには大きな大きな幸せのエネルギーが溢れている。

(二〇〇二・一〇)